
Christmas Night Story

宗像竜子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Christmas Night Story

【Nコード】

N4604P

【作者名】

宗像竜子

【あらすじ】

今日はクリスマス・イヴ。

そんな日に僕は一人、偽者のサンタクロースになっていたけれど…

…？

宗像的には珍しい、男性一人称作品です。

あなたの元にも、本物のクリスマスプレゼントが届きますように。

雪が降っていた。

肌を切りつけるような凍えた大気に、人々は身を縮めて足早に歩き去る。

そんな中、僕は真つ赤な衣装を着込み（ちなみに下腹部に詰め物をしていたりする）、顔には真つ白な付け髭。

頭も負けずに白い巻き毛の鬘かつらを被って、その上に衣装と同じ色の三角帽子を乗せていた。

そして肩に担いだ白いずた袋。

そんな　多分知り合いが僕を見ても僕だとわからないような格好の僕を指差して、通りがかった子供が嬉しそうな歓声を上げる。

その母親は子供を嗜たしなめるように、その手を引つ張った。

『サンタさんだよ！』

『はいはい。でもね、おうちに帰っていい子にしてないとうちまで来てくれないわよ？』

そんな会話でもなされていたかも知れないけれど、あいにく声は僕の所まで届かなかった。

心残りの顔で引つ張られていく子供は、その大きめの手袋に包まれた手を僕に向かって振りながら、街の喧騒に紛れていく。

手を振り返しながらも、僕は内心ため息をついた。

今日はクリスマス・イヴ。

老いも若きも、仏教徒だろうと神道だろうと関係なく人々が浮かれる日。

そんな日なのに、何故僕はこんな所で一人で偽者のサンタなんかやってるんだろう？

友人達は恋人達とクリスマスを過ごすのだとか何とかにやけた顔で言っていたし、当の僕の彼女はと言うと、友達とパーティなのだとか言って済まなさそうに出かけてしまった。

付き合い始める前からの約束だったそうで、お人好しな彼女は断れなかったらしい。彼女らしいと思ったから腹は立たなかった。

だから仕方なくバイトに行けば、こんな有様だ。うんざりした気分では空を見上げてみる。

街の明かりのせいでも、星一つ見えなかった。ただ月だけが淋しそうに浮んでいる。

何だか余計に悲しくなつて、僕は今度は声に出してため息をついた。あゝあ。

+ + +

「やあ、こんばんわ」

不意に背後からそんな声をかけられたのは、クリスマスセールの人配りのバイトから、そろそろ上がるうかと思つた矢先の事だった。

振り返ると、そこには見覚えのない紳士風の老人。

豊かな白ヒゲをたくわえた好々爺じいじやといった感じの顔に恰幅かっぶくのいい体型は、僕よりもよっぽどサンタクロースの扮装が似合いそうだった。

「…はあ」

どう答えていいのかわからずにそんな生返事を返すと、そのおじいさんはにこにこ笑いながら近寄ってきた。

「メリークリスマス！ こんな時に働くなつてご苦労さんだね」

「はあ」

またしても生返事。陽気な口調に一瞬酔っ払いかと思つたけれど、酒臭さはなく、鼻の頭が赤いのは単に寒さのせいらしい。

おじいさんは着込んだダークグレーのコートのポケットに手を突っ込んだかと思うと、いきなりその手を僕の目の前に突き出した。

「？」

「そんな働き者の君にクリスマスプレゼントをあげよう！」

上機嫌に言い放ったおじいさんの肉厚な掌の上に、一つの小箱。

深いグリーンของラッピングペーパーに、目に鮮やかな赤のリボン。いかにも、といったクリスマスカラーだ。

「あ、あの……」

「さ、受け取りたまえ！」

うつたえる僕に、おじいさんは笑顔でその箱を押し付ける。

「これはね、本物のクリスマスプレゼントなんだよ」

自信満々にそう言っ、器用に片目をつぶる。そんな仕草に嫌みがなかったせいか、咄嗟に反応出来なかった僕の手はその箱を押し付けると、おじいさんは満足そうに笑った。

「あの、困りま……っ！」

慌てて返そうとすると、おじいさんの好々爺めいた笑顔の中で、その細めの目だけが淋しげな色を浮かべた。

「……もつとも、それを欲しがらん人間も随分と少なくなってしまったがね」

その瞬間、不意打ちでも受けたかのように僕は言葉を失ってしまった。

一体その言葉の何に衝撃を受けたのか、自分でもよくわからなかったけれど、何だか自分の中にある寂しさに近いものがその言葉にあるような気がした。

「それじゃ、よいクリスマスを！」

おじいさんがそう言っ、あつと言っ間に人込みに紛れてしまうのを、僕は結局そのまま見送ってしまった。

手の中に残された小箱がなかったら夢かと思うほど、それは本当にあつと言っ間の出来事だった。

+ + +

「お疲れ」

「おう、またな」

午後23時。僕はようやく偽のサンタクロースの任を解かれた。やはり今日という日を暇で持て余す人々が、疲れた笑顔で見送ってくれる。彼等はこれから飲みに行くとか言っていたが、僕は辞退した。

…悲しいかな、自棄酒したい気分というのに僕は下戸だった。付き合っものは構わないけれど、飲まない人間がいる安心感からか、みんな泥酔して後が大変なんだ。

いくら一人が寂しいからって、イヴの夜を酔っ払いの世話に費やすなんて切なすぎる。

「…寒……」

すっかり人通りの絶えた通りを、早足で歩く。吹き付けてくる北風が身に凍みた。

下宿先のアパートに戻ってヒーターをつけたとしても、すぐには温まらない。しばらくは寒いであろう狭い1Kを想って、さらに加速度をつけて気分が沈んでいく。

アパートまでバイト先から徒歩20分。学生アパートが軒を連ねるだけあって、コンビニが林立している。

その明かりに誘われてふらふらと中に入り、遅い夕食代わりの鍋焼きうどんを買い込んで、ちよつと雑誌なんかを見てぶらぶらしてみた。

冷え切った外に比べると、コンビニの中は正に天国だ。少しばかり冷えた身体を温めて、また帰路についた頃には日付が変わろうとしていた。

+ + +

例のおじいさんからもらった箱を思い出したのは、ちょうどアパートの階段を上っている最中だった。

「あれ？」

コートのポケットを探って部屋の鍵を取り出そうとした時に、箱が指に触れた。

取り出してみれば、やはり先ほどおじいさんに貰った（正確には押し付けられた）クリスマスカラーでラッピングされた箱だ。

「…そういや何が入ってるんだ、これ？」

ふと浮かんだ好奇心で、その場でラッピングを剥がしながら残りの階段を上る。部屋のある三階に上りきった時にちょうど箱を開く事が出来た。

「…あれ？」

そこには、何も入っていなかった。

「……」

騙されたのか。そりゃ、期待なんてほとんどしてなかったけど。あんなに人が良さそうな顔をしておいて、入って信用がならないもんだ。

腹は立たず、たださらに気分が落ち込んだ。僕は一体何処までツイてないんだ。

肩を落としたまま、鍵を探り出し寒い部屋に入る。空の小箱を散らかったテーブルの上辺りに放り投げた。

そのまま手探りで電気をつけ、明るくなった所ですぐに石油ヒーターと炬燵こたつもつけた時、まるで待ちかねたように携帯が震えた。

「は、はい？」

『あ、やっと出た』

電話してきたのは、僕の彼女だった。

『何度も電話したんだよ？』

まったく気付いてなかった。仕事中は音を消す癖があるから時々気付かないんだよなあ。

「ご、ごめん…って、何の用だよ？」

反射的に謝りかけて、こちらが何も悪い事はしていない事を思い出し、僕は彼女に尋ねた。

尋ねながら時計を見ればまさに0時を過ぎた辺りだった。

『メリークリスマス』

「は？」

『だからっ、メリークリスマスってば！ ほら、今日…もう日付変わったから昨日だけど、折角のイヴなのに出かけちゃったでしょう。だからせめて、ね』

言い訳めいた事を早口で言いながら、彼女はむきになったように言葉を重ねてくる。

『第一、本当のクリスマスは今日なんだしさ』

「…まあ、そりやそうだけど」

僕はと言えば、結局の所こんなタイミングで彼女の声が聞けると思わなかったので、ばかみたいに間の抜けた相槌を打つ。

「今日は…楽しかった？」

『え？ …うん、まあそれなりに』

今度は彼女が適当な答えを返す。何だかもどかしいな、と思った時に彼女が言った。

『でもね、本当は二人で過ごしたかったの』

「……」

『だから、ちょっと気分だけでもクリスマスに浸りたかったんだ。

ごめん、こんな時間に電話かけて。今日はバイトだったんでしょ？』

「…そうだけど」

『じゃあ疲れてるでしょ。もう切るね』

やっぱり早口でそんな事を言うものだから、僕は慌てて電話口で叫んでいた。

「ちよっと待った！！」

『…な、何？』

「僕も、過ごしたかったよ。…ずっとへこんでたしさ」

苦笑混じりそう言っていると、彼女が照れ臭そうに笑う声が受話器から

聞こえてきた。

「…何で笑うんだよ、そこで」

『ごめ〜ん。だつてさ…ふふふ』

それからしばらく彼女の笑いの発作は治まらなかったのだけでも、それまで落ち込んでいた気分は完全に浮上していた。

『…あれ？』

くすくす笑っていた彼女が不意に笑いを収め、不思議そうに尋ねてきた。

『何か、音が鳴ってる？ …えっと…ジングルベルかな、これ』

「音？」

言われて耳を澄ますと、確かに何処からともなく聞き覚えのあるメロディラインが。

それはどうも僕の部屋のどこから流れてきているようだった。決して大きくはないけれど、何処か金属的なピーンと耳に届く音。

『オルゴール……？』

電話口の彼女が言つて、あまりその手のものには詳しくない僕もそのようだと判断した。

問題は、だ。

そんなものがあるはずのない僕の部屋から、どうしてそんな音が今になって鳴り始めたのか、という事。ただ、不思議と恐怖は感じなかった。予感があったからかもしれない。

「…うん、オルゴールだ」

音源を確かめて、僕は彼女に答えてやった。

色んなものが放りだされたテーブルの上に、先ほど放った小箱が口を開いた状態で転がっている。その、はずだったのに。

代わりに掌サイズの小さなオルゴールが、当たり前のように鎮座ましましていた。

不意に思い出す。その箱を押し付けたおじいさんの台詞を。

これはね、本物のクリスマスプレゼントなんだよ……。

もつとも、それを欲しがる人間も随分と少なくなってしまうがね……。

これで閃かなかったら、大概の人はばかだろう。とっくの昔に信じるのをやめた存在。僕が心ならず扮装した人物。

あのおじいさんこそ本物の　。

『何でそんなの持ってるの？　貰ったの？』

素朴な彼女の疑問に、僕は笑って答える。

腐っていた僕を浮上させた僕のサンタクロースと、本物の魔法を見せてくれたサンタクロースに思いを馳せながら。

「うん。通りすがりの、サンタクロースにね」

* Merry Chris

tmas *

（後書き）

これも元々は古い作品です。再掲載にあたって、ちょっと現代アレンジしました（携帯とかね・笑）

HPで初めて音を鳴らした時、プレイヤーの表示の仕方を教えてください。ださった方に書き下ろしてお送りした作品が元になっています。

男性一人称＋現代ものという、当時としては冒険（笑）した作品なのですが、割りとすっきりまとまっていて、自分では結構お気に入りの作品となりました。

また機会があれば、この手の話にもチャレンジしてみたいものです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4604p/>

Christmas Night Story

2010年12月12日17時56分発行